

高際先生の思い出

米 山 正 文

高際先生のご退職にあたり、様々な思い出がよみがえる。いつも笑顔の先生は、温厚で誠実なお人柄から多くの学生に慕われ、また教育や研究に確固とした信念をお持ちの方であった。そんな先生を、学生も同僚の私たちも何か困ったことがあるたびに、ずっと頼りにしてきたように思う。

研究者としての先生のお仕事について伺う機会はありませんでしたが、昨年、ある校務をご一緒させて頂いた折、そうした機会を少し持つことができました。一仕事終了後、先生が大学に隣接するコンビニエンス・ストアでコーヒーでも飲もうと誘って下さった。いま終了した仕事のことを話題にされるのかと思ったら、先生はその年の夏季休暇に訪れた大英図書館での資料調査のことを熱心に語り始めた。そこではイタリア歌劇やイギリス歌劇の演劇台本が膨大に所蔵されていて自由に閲覧できること、特にバラッドオペラについて色々な発見が得られたこと、翌年も何々の資料を調査するために渡英する予定であることを、本当に生き生きと楽しそうにお話しになった。お話しはいつまでも尽きなかった。不勉強でひたすら拝聴することしかできなかつたが、いつしかこちらも引き込まれるのを感じた。先生が数年間、パーセルやヘンデルに関して独創的な研究を続けておられることは知っていたが、そうした研究の長く地道な蓄積や、先生の飽くなき探求心の一端に初めて触れた思いがした。

教育に関して先生と共通の仕事となると、英語関連の授業ということになる。私が赴任した頃の共通教育の授業（現在は「基盤教育」）、また学部の専門外国語の授業などである。先生は1、2年生向けの基礎的な授業から、学部の合宿形式の「英語会話」、そしてより専門的な「時事英語」に至るまで、幅広い授業をご担当された。英語教育については時代とともに色々なブームが訪れ、また大学の方針も変化していく。しかし、先生は時流に流されず、自らの学習と教育の経験から、最良の英語教育の在り方を信念として確立しているように思われた。いわゆる生活体験としての英語から、大学での学習に資する英語まで、どういふものが必要とされていて、どういふ教育をなすべきなのか、常にお考えになっていたように思う。それは何かの折に先生から出される意見や寸評にすっきりと刻み込まれて

いた。英語教育には素人同然だった私にとって、そうした姿勢から学ぶことは多かつた。

こういう機会に言及するのは不適切かもしれませんが、先生からもお叱りをうけそうだが、先生の趣味についても一言だけ触れておきたい。ご存じの方も多いと思うが、先生の日本酒への造詣はずば抜けている。英国文学・文化をご専門なので、嗜好はウイスキーやビールであろうという私の浅はかな先入観は壊されてしまった。先生は日本全国の銘酒に精通しておられるばかりでなく、その製造過程や自然環境、酒米、水、飲み方、肴との相性に至るまで、完璧に熟知しておられた。そのあまりの該博ぶりに細やかな挑戦をしたく、旅行先で珍しい酒に出会った時に「先生、〇〇で〇〇というお酒を飲みましたよ。なかなか旨かったですよ」などと威張ると、先生は「ああ、〇〇ね、飲み口がいいよね」と知っておられ、軽くいなさされてしまうこと度々であった。ヘンデルについての本をいつかお書きになってほしいと思いながらも、実は日本酒についての本もお書きになってくれないかと密かに切望している。

他にも先生の思い出はたくさんある。赴任したばかりで共通教育英語の時間割作成に窮していたときに休日出勤で手助けして下さったこと、宇都宮市内のアイリッシュ・パブに連れて行って下さったこと、資料室でいつも懇切丁寧に学生の指導をされている姿など、様々な情景が思い出される。先生は人の輪を大切にされ、調和を重んじておられた。そして、真の意味で良識の人であった。

昨年に体調を崩されたのが心配だが、校務から解放された後は、お身体を大切にされ、ますますご活躍されることを心よりお祈りしている。